勝林寺寺報

求めれば道は開ける

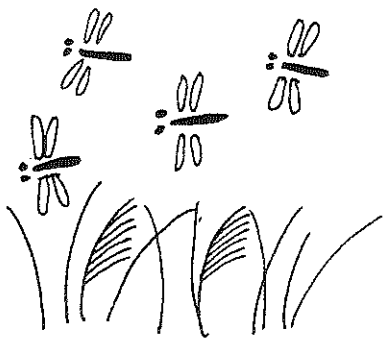
大病をわずらって、医師から厳しい宣告を受け、自分の死を思うようになられた、ある女性の話です。死を眼前にして、生への執着はいよいよたちがたく、死の恐怖から逃れようとして悶々の日々を送られていました。しかし、この方は幼い日に仏縁深く育てられていたこともあって、私との交わりが生まれ、いつもいつも遠く離れた地から、もう何年も、私の法話を聞くために、電車を乗り継いで通われました。また手紙を通しても、様々な不安や疑問を訴えてこられました。「私には、どこにも安住の場所がありません。どこかわたしの居場所がほしいのです」ということでした。

私はできる限り誠実に返事を送りました。「もともとこの人生は旅路でしかなく、この世の中に安住の場所があろうはずがない。」「あらためて真剣に、まことの安住の地を探し求めてほしい。お念仏を申して生きる道の彼方こそ、あなたの願う安らいの世界がある」ということを繰り返して語りました。

そして先日、こんな手紙をいただきました。「力のつきはてた私は、いま頭をたれて、仏さまの前に立たせていただいております」「先日の夜、ふと窓越しに夜の星空を見あげたとき、なにか深い大きな感動が私を包みました。そして私は、あなたのところに帰らせていただくのでした。帰らせていただきます。阿弥陀さま、と思わず申しておりました。涙があふれてきました。そしてその日まで精いっぱい生きていこうと思いました。」「それからは、一気に体が軽くなったような気がしました。そしてたくさんたくさん、お念仏をもうしました」「今まで、仏法を学びながら、自分自身の都合のいいように切り貼りして、聴聞していたことを知って恥ずかしく思います」「阿弥陀さまが、もう帰ろうよ、帰っておいでとおっしゃるその日まで、私が一番大好きなこの世に止まらせていただきます。悲しいのですが、さみしいのですが、今は大変心安らかで、とてもとてもありがたい気持ちでいっぱいです。」「こんなお礼のお手紙が書けるようになろうとは、本当にありがたいことです。これからもお念仏をもうしつつ、精いっぱいに生きてまいります」

私はこの手紙を読んで思わず泣きました。そしてとても嬉しく思いました。求めれば道は必ずひらけてくるものです。

（信楽峻麿遺稿法語集より引用）



葬儀
八月一日
出合　清水　儀一様　九十六歳
八月十七日
松枝　山田　正直様　九十歳

ご案内

秋の彼岸会法要

「暑いですねー」が常套句だった夏の終わりが少しずつ近づいている気配が感じられるようになりました。ススキが穂を出し、気の早いコスモスが風に揺れています。

勝林寺の本堂にも、ようやく涼しい風が通るようになりました。彼岸会にお参りください。

日時
平成二十八年九月二十二日（木）秋分の日
午後一時三十分より
内容　正信偈お勤め
法話　勝林寺住職

ご報告

戦没者追悼法要

去る八月八日、アブラゼミの鳴き声の降る中、総代様、仏壮仏婦法輪会役員様、ご遺族様の出席のもと、戦没者追悼法要を厳修いたしました。遠く離れられたご遺族からお供えと共にお礼のお便りをいただき、七十一年がたっても、決して忘れることなく、犠牲になられた方々に思いを馳せておられる姿に、あとを任されたものの勤めとして、これからも絶やすことなく続ける大切さを強く感じたことでした。

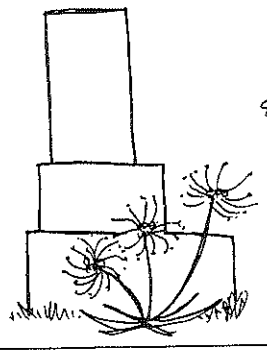
仏婦子ども研修会

八月十九日、一六名の子どもたちと、十五名の保護者、スタッフの参加を得て、終日、阿弥陀さまの周りに子どもたちの元気な声と、神妙な顔つきが集まるいい一日を過ごさせていただきました。当日、お葬式があり、席を外す時間の長かった住職に代わり、若院、次男の入海、保護者として参加くださった総代の稲葉さんなど、たくさんの方に助けていただきました。

九月　勝林寺　予定

三　日（土）　福富　剛宅　一七回忌
四　日（日）　出石組　サマースクール
（西光寺）
濱　和宏宅　二五回忌
一一日（日）　清水正和宅　忌明法要
一二日（月）　龍谷大学臨床心理学科
シカバレー見学研修
一七日（土）　濱美知代宅　三・一〇〇回忌
一九日（月）　山田正視宅　忌明法要
二二日（木）　秋彼岸会
合同役員会
二五日（日）　出石組連研　勝林寺
二六日（月）　みのりを聞く会

（敬称略）



「まんまんちゃん、いただきます」

「おててをパチ、まんまんちゃんいただきます。」もう三つになろうとする男の子。朝の食卓にすわるとすぐに、かわいいおててをパチンっと合わせて申します。

「みんな、いただきますしないとダメ！」うろうろしている大人たちも、この子に促されて

「おててをパチ、まんまんちゃんいただきます」お昼になりました。ブロック遊びに熱中していたこの子、またおててをパチしてから申します。

「お腹がすいたよー、まんまんちゃんからおぶっぱんいただこうよー」

夕食です。お仏壇にお参りしてこの男の子、またおててをパチしてから申します。

「まんまんちゃんはあみださま、なんでもあみださまからいただくんだねー」

阿弥陀さまは、清らかな大きな光の中から、私たちのうちの仏壇の中に姿を表して、この子のいのちを光の中に包んでいてくださっているようです。お仏壇は、仏さまをおまつりする場所とはちがいます。お仏壇は、仏さまが、私たちの暮らしをこのように豊かな暮らしに仕立ててくださるためにお出ましになっているところです。

「おててをパチ、まんまんちゃんいただきます」私たちも、阿弥陀さまの光の中で豊かに過ごさせていただきたいものです。

わたしのうちの宝物

私のうちには、大変な宝物があります。それは、小さいお仏壇です。

私の父と母が結婚して、新しい家を建てて住み始めたとき、亡くなったおじいちゃんがこの新しいお家のお祝いにといってプレゼントしてくれたのだそうです。どんなに小さくても、中味は金ピカで立派です。いつも美しい花があって電灯がともっています。母は、いつもお参りした後、

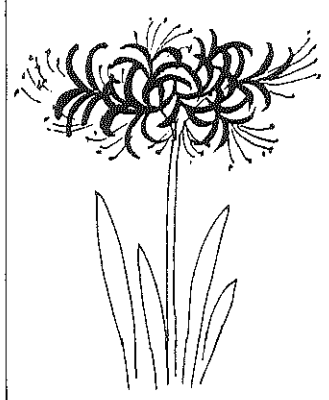
「ここは如来さまの出店だよ。如来さまが、おとうさんやおかあさん、明子のうちにまで出張してくださっているんだよ。おじいちゃんがそう言ってプレゼントしてくださったの」

といいます。

私は、たいてい母と一緒におまいりします。夕食の後片付けが済んだあと、母が「明子」と呼んでくれたら、勉強をおいて、お参りにいきます。「らいはいのうた」というのをうたいます。母は、とってもいい声です。母の声に包まれているようで、とてもあったかいです。弟の謙ちゃんは、たいてい父とお風呂上りにお参りします。まだ保育園ですから、ただ「おねんぶつのうた」をうたうだけのようです。

私のうちには、宝物があります。小さいお仏壇だけど、そこからいつも如来さまがみんなを見守っていてくださいます。おじいちゃんもみつめていてくださいます。

（前住職テレホン法話集第一集より）



法語カレンダー9月（HPより一部抜粋）

一生悪を造ることも弘誓に値いて救われる

ある、万引き事件を起こした高二女子が書いた反省文を紹介します。

「このたび私は、万引きという、大変恥ずかしいことをしてしまいました。謝って許されることではありません。謹慎している間は、自分自身をしっかりと見つめ、自分がいかに甘く、駄目な人間であったのかがよく分かりました。（後略）」『反省させると犯罪者になります』（新潮新書）の著者、岡本茂樹氏は、先の反省文を読んで、書いた子のことが心配になったとのこと。

「あるべき姿」の下に抑圧された姿が見えてしまうからです。それがまたいつか爆発すると。犯罪を含めた問題行動は、理由なしには起こされません。どんなに不合理な行動に見えても、当人なりの合理的かつ正当な理由があるのです。そしてそれは本人自身も気づいていない（気づきたくない）ことが少なくありません。

親鸞聖人が書かれた『唯信鈔文意』という書物に、「仏の喚び声に身をまかせるということは、悪しき心を小賢しく省みないということだ」と。たしかに、反省というのは一見すると、我が身の悪や罪を深く悔いている行為のようですが、実際に反省している自分を思い返してみると、それは自分を免罪するための手続きでしかないことが多いように思います。反省しているのだからもういいじゃないかと。そして自分が為したことを忘れ、また同じことを繰り返します。反省する前に、まず、自分自身を見つめる。受け止める。それが本当にできるのは、弘誓という阿弥陀さまの願いによるすくいの場によってこそです。そこから開かれるすくいは、「ありのままの自分」との和解に他なりません。

松本智量（まつもと　ちりょう）

とすん

ある会合で、席がお隣になった若いお母さんは、それは感じの良い方で、しばらくお話しするうちにすっかり打ち解けて会話が盛り上がりました。私が「家は、内町にある勝林寺という寺です」と名乗ると、「あっ、知ってます。私の親友の○○ちゃんと出石の町を散策したときに、○○ちゃんが『ここ、うちのお寺』って教えてくれました」といってくださいました。感じの良い若いお母さんの親友ですから、○○ちゃんも当然若い方です。その方が、勝林寺を「うちのお寺」と友達に紹介してくださったことが、心底うれしいと思った心に残る出来事でした。

今年の子ども研修会は、住職がお葬式のため席を外したので、いつも住職が担当するお寺や仏法についてお勉強する「学習①」の時間を私が勤めることとなりました。難しいことは何も教えられない私が、何を子どもたちに伝えようかと考えたときに、先ほどの出来事が思い起こされました。子どもたちにとって、「わたしの（ぼくの）○○」と親しみを込めていえるところは、家、学校、幼稚園など限られた場所ですが、その中に「寺」は、多分入ってこないでしょうね（笑）しかし、勝林寺は、ご門徒の皆さんお一人お一人にとって「わたしのお寺」であるのです。それを子どもたちに伝えたい、そして、今以上に身近に感じてほしいと思いました。久しぶりに黒板の前に立ち、チョークで「わたしのお寺」と書き、思いを伝えました。五歳から十二歳までの子どもたちに、どれほど伝わったかはわかりませんが・・。

私の言葉では、十分伝わらなかったかもしれないけれど、本堂で思い思いにのびのび時を過ごす子どもたちを見ていたら、みんなにとって勝林寺は「わたしのお寺」になってるなと思えたことでした。

（文責　坊守）